

イナイレヒロインを全員攻略し
たい。

トップハムハット卿

女好きの主人公がイナイレヒロインたちを攻略していくお話。

目次

2	1
話	話

1 話

見切り発車上等ね。

「なあ！サッカー、やろうぜ！」

「はあ……。あのさあ、円堂くん。僕はサッカーやらないって何回も言ってるよね？」

目の前にいる円堂^{えんどまもる}守という男の子から、サッカー部への勧誘を受けるのはもうこれで7回目だ。

「ええー！だってお前、リフティングあんなに上手いのに勿体ないぞ！」
断る度に、同じ理由で駄々をこねる円堂。

ちようど1週間前、足の怪我が完治していることを医者から伝えられて嬉しくなった僕は、つい河川敷でリフティングをしてしまったのだ。

そこをタイミング悪く円堂に見られ、それから毎日勧誘してくるようになった。

僕がサッカーをやらない理由は、そんなに難しいものじゃない。

小学生の時に足の怪我をして、完治するまで激しい運動を禁止されていたから体力が落ちたのだ。

完治した今は、遊び程度のものならやれるだろうけど、ガチの部活動にはついていける自信が無い。頑張って45分はプレー出来るかもしれないけど、90分もピッチに立ち続けるのは無理だ。

だから誘いを断っているのだ。

「とにかく僕は嫌だ」

「ちえゝ、頑固なヤツだなゝ」

「いや、君には言われたくないよ」

「まあいいや。明日もまた誘うからな！」

そう言うのと、手をブンブンとこちらに振って去っていった。

「他を当たってくれると嬉しいんだけどね…。それにしても、そんなにサッカー部はピンチなのかな？」

円堂の誘いは鬱陶しいけど、サッカー部の状況は少し気になる。

タイミングを見計らって、明日にでも様子を見に行こうかな。

いや、クラスメイトの木野さんがマネージャーをやってたはずだから彼女に聞こう。

「え？ サッカー部の状況？」

「うん。円堂が僕のことをしつこく勧誘してくるから、そんなにマズい状況なのかなあって気になって」

「あはは、迷惑かけてるみたいでごめんね。えーっと、今の状況は——」

木野さんが教えてくれたことを簡潔にまとめると、

- ・ 部員は木野さんを含めて8人。
- ・ 一週間後に帝国学園との練習試合
- ・ 帝国戦に負けたら廃部

との事だ。

「それはまた、マズいね」

「うん…。だから、円堂くんが※絶対に廃部にはさせない！※って部員を集めてるとこなんだ」

「そうだったんだ…。やっぱり、僕も入った方がいいのかな」

「入ってくれるの！？」

小声で言ったつもりが、聞こえていたらしい。

そんなにキラキラした目で見つめないで…！

自分で言うのもアレだけど、僕は可愛い女の子に弱い。

※弱い※とは少し違うかもしれない。

可愛い女の子に目がないのだ。

つまり、可愛ければ良し。そして好き。

要するに、僕は女好きなのだ。

だから、木野さんにそんな期待のこもった目で見られると「入部する気は無い」なんて言えなくなってしまう……。

「んー、どうしよっかなあ」

「灰崎くんって小学生の頃はサッカーしてたんだよね？」

「え？うん。よく知ってるね」

「なら、入ってくれたら心強いよ！だから、お願い！」

前のめりにお願いしてくる木野さん。

ちゃっかり、手を握られてしまった。

「んー、じゃあ 1つ条件がある」

「条件？」

「そう。条件。僕がサッカー部に入部したら、僕と 1回だけデートしてくれないかな？」

「え？……デート!？」

「そう。デート。嫌かな？」

「デデデデデ、デートするくらいなんともないよ！」

もしかして、デートに誘われたことは今まで無いのかな？

シデートというワードを聞いて顔は真っ赤だ。

そしてテンパっている。

そんな木野さんも可愛いなあ。

「じゃあ決まりだね。よし、入部するよ」

「えっ !? いいの !?」

「うん。だって、木野さんデートしてくれるんでしょ ?」

「う、うん……」

テンパっていたさっきとは違い、今度は顔を赤くして俯く木野さん。

そんなに恥ずかしいんだろうか ?

まあ、そんな木野さんも可愛いけど。

「そういうことで。さっそく今日から練習に参加するね」

そう伝えて、僕は自分の席へ戻った。

2 話

報告があるので、活動報告も読んでもらえると嬉しいです。

感想をと貰えるとする気が上がるので、良ければ。

あつという間に迎えた週末――。

そう、帝国戦だ。

「対戦前に……」と思い、帝国学園のことを少し調べたら、興味深いことが書いてあった。

それは総帥そうすいのことだ。

帝国学園総帥の名前は影山零治かげやま れいじ。

少しばかり、亜玖琉とは因縁がある。

そのせいか、いつものダルそうなオーラではなく、彼からは刺々しいオーラが出ている。

「灰崎さん、どーしたでやんすかねえ。いつもよりトゲトゲした感じがあるでやんす」

「お、俺に聞かれても分かんないっす。でも、確かに今日の灰崎さんは昨日までと少し雰囲気違う気がするっす」

チームメイト達も亜玖琉の様子に気がついている。

「なあ灰崎、緊張してるのか？」

そう声をかけたのは風丸だ。

「いや、逆かな。ちょっとワクワクしてる」

「そうか！実は俺もなんだ。サッカー初心者なのにいきなり試合だなんてな。しかも相手は中学サッカー界最強なんだろ？楽しみだよな」

ワクワクしているベクトルが亜玖琉より少しズレている気がするが、風丸も今日の対戦が楽しみらしい。

「それにしても、円堂は、よく試合ができる人数を集めることができたね……。さすがだね」

試合に備えてのアップをしているチームメイトを見て、しみじみと思う。

アップがそろそろ終わろうかという頃、帝国学園は姿を現した。

「時間通りだね」

「ついに来やがったな！帝国のヤロウ！」

「みんな！気合い入れてこーぜ！」

『おう！』

円堂の掛け声にみんなが応える。

因縁はあれど、サッカー部のメンバーに知り合いはいないので亜玖琉は黙々と準備に励む。

「なあ鬼道、あの12番、どこかで見たことないか？」

「言われてみればそんな気もするが、雷門には豪炎寺修也の他には覚えておくべ

き選手はいないと総帥から聞いている」

「そうだが…」

「考えすぎだぜ佐久間。あんな顔どこにでもいるだろ」

「寺門の言う通りだ佐久間。今は総帥からの司令をこなす以外のことは考えなくていい」

「そうだな。すまん」

亜玖琉のことをキックオフの後に思い出すことになるとは、誰も思いもしない帝国イレブン。

アップが終わり、整列をする両チーム。

コイントスの結果、帝国ボールで開始となった。

『さあ、いよいよ始まる帝国VS雷門！中学最強と名高い帝国を相手に、果たして雷門はどう戦っていくのか！?』

主審がホイッスルを鳴らし、キックオフ。

「……ちよつと本気で行こうかな」

帝国イレブンを前に、そんな言葉が亜玖琉から漏れた。

『まずは帝国ボールから！ 佐久間から寺門へ。そして寺門から鬼道へ』

佐久間からパスを受けた寺門が鬼道へパスしようと、足からボールが離れた瞬間………ボールが消えた。

「なに!？」

何が起ったのか分からず、両チームとも動揺している。

そして次の瞬間、ゴールネットが揺れた。

『…ゴ、ゴーーーーール！ 先制したのは——雷門だぁー!!!!!!』

ホイッスルが鳴ってから、まだほとんど動いていない21人。

唯一移動していた男——灰崎亜玖琉は帝国ゴールの前でポツリといた。

「お、おい。まさかあれって灰崎がやったのか？」

染岡は何が起こったのか分からず、とりあえず味方に聞いてみるが、誰も答えな
い。

彼と同じく、誰もまだ頭が追いついてない。

「あれ？天下の帝国学園さんもこの程度？」

「くそっ！一体何をしたんだ！」

「何って、パスカットしてシュート打っただけだよ？」

そう言っ、亜玖琉は左耳に髪をかきあげ――

「あ、ありゃ」

「え!? 灰崎くん!?」

グラウンドに尻もちをついた。

「どうした！灰崎！」

様子を確かめに、円堂がゴールから走ってくる。

「ごめん、バテちゃった」

「ば、バテた!?」

「あはは、やっぱり 1年以上もブランクがあるとキツイね。体力がこんなにも

落ちてるとはさすがに予想外かな」

「てことは、プレー続行は……」

「無理だね。てことで、目金くん、後はよろしくね」

一瞬でゴールを決め、そしてその一瞬で体力を使い果たした亜玖琉は、木野に肩を貸りて、そのまま保健室へと向かった。

木野に肩を貸りている時の亜玖琉の顔は、皆さんお察しの通りです…。

「大丈夫か？ 目金」

「ただただだ、大丈夫ですよ！ この僕がいるからには、たとえば天下の帝国学園であつても敵ではありません！」

気を遣って半田が目金に声をかけるが、大丈夫ではなさそうだ。

残像が見えるレベルで足が震えている。

いろいろと忙しそうな雷門イレブンに比べ、帝国イレブンの佐久間は顔を青くしていた。

「思い出した…。思い出したぞ鬼道！」

アイツは————小学校の頃、ニュースや雑誌で見た覚えがある！

韓国の少年サッカー界を震撼させた男、ナイトメア 韓国の悪夢。

灰崎亜玖琉だ！」

「灰崎……。俺もようやく思い出した。

だが、あいつは怪我でサッカーを辞めたはずだ……。

まさか治ったのか……。」

「帰ったら総帥に報告しよう」

「ああ。だが今はそれより、豪炎寺をグラウンドに引きずり出すのが最優先だ。

帝国として、これ以上の失態は許されん！

みんな、気を引き締めろ！」

『おお！！！！！！』

鬼道の一声で、帝国イレブンの目付きが変わった。

前半 1 分 灰崎↓目金

選手交代が終わり、1・0 の帝国ボールで試合は再開。

――
30
分後、
スコアは
1
・
20
となっ
ていた。

イナイレヒロインを全員攻略したい。

著者 トップハムハット卿

発行日 2019 年 12 月 22 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/209248/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
